

「最期の姿」議論の入り口に

映画「安楽死特区」、23日から神戸で上映



「死が身近になった新型コロナ禍を経て公開されることに意味を感じる」と話す主演の毎熊克哉(右)と製作総指揮の長尾和宏医師＝大阪市内

なり得るため、応えることができない」と長尾医師はいう。日本では「死の選択が自分という一人称ではなく、家族の決定に左右される傾向がある」とも。「どのような最期を望むのか、尊厳のある死とは何か、議論してほしい」と願っている。



映画の一場面(©「安楽死特区」製作委員会)

主演の毎熊は「せりふを覚えるよりも前に」、安楽

死を望む当事者の話を聞いた。「映画はフィクションだが、実際に安楽死を望み、選ぶ人がいる。その人たちが映画を見たときにどう思うかを考えた」と振り返る。パーキンソン病特有の症状を全身で演じることに戸惑いを覚えたが、「自分が今のところ健康だからそう

思っのかも。出て当然の症状を見せないのは間違っていると、撮影初日までに心を固めた」と明かす。毎熊は「当事者、家族、医療従事者など、立場によって映画の見え方が変わるはず。今、死に直面していない人にも本気で考えるきっかけになれば」と話した。

2時間9分。キノシネマ神戸国際館078・230・3580 (安藤真子)

日本ではタブー視されがちなテーマを取り上げた映画「安楽死特区」が23日から、キノシネマ神戸国際(神戸市中央区御幸通8)などで上映される。誰がどのように死を決めるのか。議論のきっかけを投げかける。一部施設に限定して安楽死を認める「安楽死法案」が可決された近未来の日本。法案に反対しながら若年性パーキンソン病で余命半年となったラッパー・酒匂章太郎(毎熊克哉)は、ジャーナリストの恋人・藤

岡歩(大西礼芳)と共に専用施設「ヒトリシズカ」に入所、実態の告発を試みる。そこには末期がん患者や、完全にほける前の死を願う認知症患者、そしてサポートする医師らがいた。原作は、尼崎市で在宅医療や終末期医療に取り組む長尾和宏医師の同名小説。利己的ではない理由があれば自殺ほう助を認めているスイスの施設行きを希望する患者もいるが、「紹介状を書くことが日本の国内法で禁じられた自殺ほう助に